

書 評

Carolyn Lambert, *The Meanings of Home in Elizabeth Gaskell's Fiction* (London: Victorian Secrets, 2013)

三宅 敦子



ヴィクトリア朝のイギリス文学と言えはミドルクラスという階級を抜きに語ることはできないが、19世紀イギリスのミドルクラスと言えは、‘Victorian clutter’ という表現で有名な住空間を語らずにはいられない。20世紀末からミドルクラスのインテリア表象に着目し、インテリアの文化史と19世紀の小説研究を融合させた研究書が出始めた。まず1999年にマンチェスター大学出版から Inga Bryden & Janet Floyd による *Domestic Space: Reading the Nineteenth-Century Interior* が刊行された。これは19世紀のミドルクラスのインテリア表象を正面からとらえ、アメリカおよびイギリス文学に描き込まれた物質文化や社会史的な側面を扱った論考のアンソロジーである。執筆者には社会史、文化史、ジェンダースタディーズから文学研究に至るまで幅広い分野の研究者が名を連ねている。2年後の2001年には Thad Logan が *The Victorian Parlour: A Cultural Study* という研究書をケンブリッジ大学出版局から出版したが、こちらはミドルクラスの居間という空間に焦点を絞っている。Logan は居間に置かれた家具や装飾品に着目し、物質的な家とイデオロギーとして構築された家庭という文脈において居間の表象を分析することで、ヴィクトリア朝の家庭生活における社会的緊張をあぶりだした。2004年に出版された *Interior Design and Identity* という Susie McKellar & Penny Sparke 編著のアンソロジーは、文学作品よりもデザイン史という比較的新しい研究分野に軸足を置いた研究書だ。研究の対象となっているのは18世紀から20世紀までのアメリカ・イギリスの両国、と対象となる時代も地域も幅広いが、分析の対象となるインテリアも家庭から大西洋横断客船の船内までというスコープの広い研

究書である。

インテリア表象の研究と言えるこういったアンソロジーや研究書に比べると、Carolyn Lambertによる本書は、同じく家庭をテーマとしつつも文学研究の王道を行く研究書だと言ってもよいだろう。石造りの建物の正面玄関を写した白黒写真の美しい表紙とそのタイトルから、筆者は上記の研究書のような内容を本書に期待してしまったが、本書はむしろエリザベス・ギヤスケルの小説に登場する家庭にまつわる種々のテーマを論じたものと言える。もっともそれは、本書のタイトルが *The Meaning of Interior* でも *The Meaning of a House* でもなく *The Meaning of Home* なのだから、当然といえば当然なのかもしれない。

アメリカの有名下着ブランドと勘違いしそうな *Victorian Secrets* という出版社は、ちょっと面白い出版社だ。公式HPやインターネット上の情報によるとイギリスの独立系小規模出版社で、大手の出版社が見過ごしてきた Gissing や Jerome K. Jerome の作品や、これまで取り上げられなかった19世紀に活躍した人物の伝記、19世紀に関する研究書などを出版している。本書の著者紹介によると、著者の Carolyn Lambert もイギリス人らしい面白い経歴の持ち主だ。長年にわたりイースト・サセックスで地方公務員として勤めた後研究生活に入ったということで、サセックス大学に提出した著者の博士論文が本書の基になっている。

本書で、ギヤスケル夫人の小説における家庭の表象には、夫人自身が幼年期に体験した母や兄、父との死別による喪失感が織り込まれており、それ故に彼女の小説に描かれた家庭は当時の紋切り型の家庭像に異議を唱えるものとなっていると著者は主張する。つまり、ギヤスケル夫人が小説で提示する家庭とは、世間の荒波というストレスから身を守ってくれる安全な聖域で「理想の社会の縮図として作用する閉じられた私的空間」(9頁)ではなく、「不安定、流動的で型にはまらない」「多面的で複合的、微妙な差異があり、物理的な構造物の中に階級、ジェンダー、パワー、そして心理的な安全や安定の必要性を包み込んだもの」(9頁)なのだ。著者はこの主張を証明すべく、ギヤスケル夫人のさまざまな小説から家庭にまつわるテーマを描いた場面を取り上げ分析する。

この手法において、本書は文化史研究ではなく文学研究の王道を行くも

のと言えるが、本書には過去に出版された「家庭」というテーマについての文学研究書にも文化史研究書にも見られなかった新たな視点の導入がある。それは 19 世紀という時代を実際に生きた一人の証人としてギヤスケル夫人の体験を、結婚後の彼女が実際に家庭生活を営んだ家の間取りの分析や、家族や友人に送った書簡の分析という形で取り込んでいる点だ。これまでの研究では、例えば文学研究書であれば文学作品にみられる家庭の表象を当時の社会の比喩として解釈したり、文化史研究であれば小説を当時の歴史資料のひとつとみなして他の一次資料と併せて分析することで、家庭の表象を通して広く 19 世紀の社会を見ていた。本書はそこに当時の社会を生きた一人の人間として作家の伝記的要素の分析を加えることで、作家研究として捉えることもできるこれまでにはない新たなアプローチを試みている。

このアプローチは、特に前半で冴えている。第一章ではギヤスケル夫人が夫ウィリアムと結婚後 1850 年に引っ越した Plymouth Grove の間取り図を紹介しつつ、‘My Lady Ludlow’ (1858) という中編小説に登場する Hanbury Hall の描写に影響を与えた可能性を指摘する。Plymouth Grove の家ではギヤスケル夫人が執筆していたダイニングルームが、隣接するキッチンや応接間と扉一枚で繋がっていたという家の構造の話を、夫人の小説においてプライバシーの確保との関連で扉という建具がどのように機能していたのかという考察へと繋げている。たとえば *Mary Barton* (1848) では小説の登場人物が良い状況にある時は他者との交流のために部屋の扉が開け放たれているが、だれかが亡くなるなどで家庭がよくない状況に陥ると「家庭はもはや安全な、または居心地の良い場所ではなくなり、正面玄関が固く閉じられる」(39 頁)。またこの章では家庭に危機や緊張をもたらすものとして死というテーマを取り上げ、インドで行方知れずになった兄とギヤスケル夫人との書簡に言及しつつ、兄を救えなかったことに対して夫人が感じたであろう罪悪感と、小説の中で行方不明になる男性登場人物の救援というテーマとの関わりを論じている。

もっとも、研究生活をスタートさせたばかりの著者の博士論文が基になっていることに起因すると考えられる欠点が本書にないわけではない。本書は本文のみで 170 頁という比較的薄い研究書であるが家庭にまつわ

るあらゆるテーマを取り上げているため、一つ一つのテーマを十分論じきれないうちに次のテーマへと関心が移ってしまい、全体としてやや散漫であるという印象が読後に残ってしまう点だ。一例として、ギヤスケル夫人の小説におけるマスキュリニティを扱った第二章で展開される cross-dressing についての議論を挙げてみたい。著者は序章の副題に“Lingering ‘on the Borderland’”という表現を使用し、「家庭に関するエリザベス・ギヤスケルの経験は、常にどっちつかずの領域にたたずむアウトサイダーの経験だった」（7頁）という文章を序章の冒頭文としている。註によるとこの表現は、ギヤスケル夫人の伝記を執筆したエリス・チャドウィック夫人によるコメントから引用したということだが、第二章の cross-dressing についての議論はこの見解を発展させたものといえるだろう。だが本書のテーマを home に絞るのなら、衣服に関する議論は別の機会に譲ってもよかったのではないだろうか。もう一つ例を挙げてみよう。“Sex, Secrets and Stability: Domestic Artefacts and Rituals”と題された第三章では室内の装飾品が分析の対象となっているのだが、この章には *North and South*(1855) の中でソーントン氏が、後に結婚することになるマーガレットが絶えず落ちるプレスレットを押し上げるという仕草に魅せられるという状況を描くことで、二人が親密になる瞬間を創り出しているという指摘がある（103頁）。室内装飾も服飾品も英語にすれば decorative objects であり ornament と表現できるので、この議論の展開はおかしな展開とは言えないが、身体装飾にまで話題を広げずとも室内装飾に絞って論を展開し深めた方が、家庭というテーマのもとにもっと上手く統一感を出せたのではないだろうか。

先行するインテリアの表象研究とは異なり文学研究に軸足を置いた本書では、一次資料として本文中に引用している資料はギヤスケルの書簡を除けばそれほど多くはない。ただ興味深い資料として広告用パンフレットに言及している点をここで指摘しておきたい。焔辺はヴィクトリア朝の室内について論じる際に欠かすことができない場所だが、その重要性を論じる際に Logan の研究書を引用した後、1874年に出版された Alexander Boyd & Son の *The English Fireplace: Its Advantages, its Objections and its Rivals. Considered with a View to Utility and Economy.* という広告用パンフレットへ

と話題を広げ、その中で各部屋にふさわしい暖炉についての実際的なアドバイスをマーケティングにうまく利用されていることに言及している。室内装飾をテーマにした研究が始まってもうすでに15年ほど経つため、一人の作家の作品をこのテーマで論じるという研究の方向性にはある程度限界が見えてきており、広告という新しい一次資料に目をつけてオリジナリティを出そうとしているのだと考えられる。

長らくエリザベス・ギヤスケル研究やインテリアをテーマにした文化史研究を行ってきた研究者にとっては、本書はさほど新鮮味のある研究書とは言えないかもしれない。だが、これからギヤスケル研究を始めようという院生、博士論文を執筆しようとする院生にとって、詳細な註や文献リストをはじめ、先行研究をきちんと押さえつつオリジナリティを出す方法など参考にするところが多いコンパクトな研究書と言えるだろう。